

夏目漱石

長谷川君と余



長谷川君と余

長谷川君と余は互に名前を知るだけで、その他にはな
んの接触もなかった。余が入社の当時すらも、長谷川君
がすでにわが朝日の社員であるということを知らなかつ
たように記憶している。それを知りだしたのは、どうい
う機会であつたか今は忘却してしまつた。とにかく入社
してもしばらくの間は顔を合わせずにいた。しかも長谷
川君の家は西片町で、余も当時は同じ阿部の屋敷内に住
んでいたのだから、住居からいえばつい鼻の先である。

だからほんとうをいうと、こっちから名刺でも持って訪問するのが世間並せけんの礼であっただけけれども、そこをつい怠なまけて、どこが長谷川君の家だか聞き合わせもせず横着きを極めてしまった。すると間まもなく大阪から鳥居君とりいくんが来たので、主筆の池辺君いけべくんが我々十余人を有楽町の倶楽部クラブへ呼んで御馳走ごちそうをしてくれた。余は新人の社員として、その時はじめてわが社の重なる人おもと食卓を共にした。そのうちに長谷川君もいたのである。これが長谷川君でと紹介された時には、かねて想像していたところと、あまりに隔へだたっていたので、心のうちでは驚きながら挨あい

撈さつをした。はじめ長谷川君のはいつて来た姿を見たときは——また長谷川君が他の昵懇じっこんな社友とやあという言葉
を交換する調子を聞いた時は——まったく長谷川君だとは気が付つかなかつた。たゞ重おもな社員ひひとりの一人ひとりなんだろうと
思った。余は若い時からいろく愚ぐなことを想像する癖があるが、未知の人の容貌ようぼう態度などはあまり脳中に描かない。ことに中年からは、この方面ほうめんにかけるとまったく
散文的になつてしまつている。だから長谷川君についてもべつだんに鮮明な予想は持もつていなかつたのであるけれども、冥々めいめいのうちうちに、漠然ぼくぜんとわが脳中に、長谷川君と

して迎えるあるものが存在していたと見えて、長谷川君という名を聞くやいなやおやと思った。もつともその驚き方を解剖して見るとみんな消極的である。第一あんなに背の高い人とは思わなかった。あんなに頑丈がんじょうな骨格を持った人とは思わなかった。あんなに無粋ぶいきな肩幅のある人とは思わなかった。あんなに角張った顎あごの所有者とは思わなかった。君の風丰ふうぼうはどこからどこまで四角である。頭まで四角に感じられたから今考えると可笑おかしい。その当時「その面影おもかげ」は読んでいなかっただけれども、あんな艶つやっぽい小説を書く人として自然が製作した人間と

は、とても受取れなかった。魁偉かいいというところ少し大袈裟おおげさで悪いが、いずれかというところ、それに近いほうで、とうてい細い筆などを握って、机の前で呻吟しんぎんしていきそうもないから実は驚いたのである。しかしそのうえにも余を驚かしたのは君の音調である。白状すれば、もう少しは浮いてるだろうと思つた。ところが非常な呂音りよおんでたいへん落ち付いて、緩ゆるたりした、少しも逼せまるところのない話し方をする。しかも余に紹介された時、君はたゞ一二語しか言わなかつた。(もつとも余も同じ分量ぐらいしか挨拶に費やさなかつたのは事実である。)その言葉は今まっ

たく忘れてゐるが、普通にありふれた空虚な辞令でなかつたのは慥たしかである。むしろ双方で無愛想ぶあいそうに頭を下げたのだつたらうが、自分のことは分らないから、相手の容よう子すだけに驚くのである。文学者だからお世辞せじを使うとする、ほかの諸君に済すまないけれども、実をいえば長谷川君と余の挨拶が、あゝ単簡至極に片付かたづこうとは思わなかつた。これ等らは皆予想外である。

この席上で余は長谷川君と話す機会を得なかつた。たゞ黙つて君の話はなしを聞いていた。その時余の受けた感じは、品位のある紳士らしい男——文学者でもない、新聞

社員でもない、また政客でも軍人でもない、あらゆる職業以外に厳然として存在する一種品位のある紳士から受くる社交的の快味であった。そうして、この品位は単に門地階級もんちから生ずる貴族的のものではない、半分は性情、半分は修養から来ているということを悟った。しかもその修養のうちには、自制とか克己とかいういわゆる漢学者から受け襲ついで、しいて己おのれを矯ためた痕迹こんせきがないということを発見した。そうしてそのいくぶんは学問の結果おのずからここに至ったものと鑑定した。またいくぶんは学問と反対の方面、すなわち俗に言う苦勞をして、野暮やぼ

を洗い落として、そうして再び野暮に安住しているところから起ったものと判断した。

そのうち、君は池辺君いけべくんとロシアの政党談をやり出した。たいへん興味があると見えて、いつまで立っても已やめない。娓娓びび数千言すせんげんというとむやみに能弁しやべに喋舌しやべるように聞こえておるいが、時間からいえば、こんな形容詞でも使わなくってはならなくなるくらい論じていた。その知識の詳密精細なることはまた格別なもので、向って左のどの辺だれに誰だれがいて、その反対の側に誰の席があるなどと、まるでロシアへ昨日きのう行って見て来たように、例のむずか

しい何々なになにスキーなどという名前がいくつも出た。しかし不思議にもこの談話は、物知り振ぶった、また通つうがった陋悪ろうあくな分子を一点も含んでいなかった。余はもとより政党政治に無頓着むとんじゃくな質たちであつて、今の衆議院の議長は誰だつたかねと聞いて友達ともだちから笑われたくらいの男だから、ロシアに議会があるかないかさえ知らない。したがってこの談話にはなんらの興味もなかった。それで、あんまり長いから、談話の途中で失敬して家うちへ帰ってしまった。これが余の長谷川君と初対面の時の感想である。

それから、幾日か立って、用ができて社へ行つた。汚きたな

い階子段はしごだんを上がつて、編集局の戸を開けてあはいると、北際きたがわの窓際に寄せて据すえた洋机テーブルを囲んで、四五人話をしてい
るものがある。ほかの人の顔は、戸を開けるやいなやす
ぐ分つたが、たった一人余に背中を向けて椅子いすに腰を卸お
ろして、鼠色ねずみいろの背広を着て、長い胴を椅子いすの背から食は
み出さしていたものは誰だか見当が付かなかつた。横へ
回つて見ると、それが長谷川君であつた。その時余は長
谷川君に向つて、「ちよつとお訪ねたずをしようと思ふんだ
が」と言ひだして、まだ句を切らないうちに、君は「い
や低気圧のある間は来客謝絶だ」と言つた。低気圧とは

なんのことだか、君の平生を知らない余には不得要領であつたけれど、来客謝絶の四字のほうが重く響いたので、聞き返しもしなかつた。ただ好い加減かげんに頭の悪いことを低気圧と洒落しゃれているんだらうぐらいに解釈していたが、後あとから聞けば実際の低気圧のことで、いやしくも低気圧の去らないうちは、君の頭は始終懊惱おうのうを離れないんだということが分つた。当時余も君の向うを張つて来客謝絶の看板を懸かけていた。もつともこれは創作の低気圧のためであつたけれども、来客謝絶は表向き双方同じことなんだから、この看板を引き下ろさせるだけの縁故も親し

みもない両人は、それきり面談をする機会がなかった。

ところがある日の午後湯に行った。着物を脱いで、流しへはいろうとして、ふと向うむきになって洗っている人の横顔を見ると、長谷川君である。余は長谷川さんと声を掛けた。それまではまるで気が付かなかった君は、顔を上げて、やあと言った。湯の中ではそれぎりしか口を利きかなかった。なんでも暑い時分のことと覚えている。余が身体からだを拭いて、莫ご蔭ざの敷いてある縁先で、団扇うちわを使つかって涼んでいると、やがて長谷川君が上がって来た。ままず眼鏡めがねを掛けて、余を見付け出して、向うから話を始め

た。双方とも真赤裸まっぱだかのように記憶している。しかし長谷川君の話し方は初対面の折ロシアの政党を論じた時と毫ごうも異なることところなく、呂音りよおんで落ち付いて、ゆっくりしているものだから、まったく赤裸はだかと釣り合わない。君は少しも顧慮する景色も見えず醇じゅんじゅん々々として頭の悪いことを説かれた。なんでも去年とか一度卒倒して、しばらく田た端辺ぼたへんで休養していたので、今じゃ少しは好いいようだとかいう話であった。「それじゃ、まだ来客謝絶だろう」と冗談じょうだん半分に聞いてみたら、「まあ……」とかなんとかいう返事であった。「それじゃ、行くのはまあ見合せよ

う」と言つて分かれた。

その秋余は西片町を引き上げて早稲田^{わせだ}へ移つた。長谷川君と余とはこの引越のためますます縁が遠くなつてしまつた。その代り君の著作にかゝる「其面影」^{そのおもかげ}を買つて来て讀んだ。そうして大いに感服した（ある意味から言へば、今でも感服している。こゝに余のいわゆるある意味を説明することのできないのは遺憾であるが、作物^{さくぶつ}の批評を重^{おも}にして書いたものでないから已^やむをえない）。そこで、手紙を認^{したた}めて、いさゝかながら早稲田から西片町へ向けて賛辞を郵送した。実は脳病が氣の毒でなら

なかつたから、こんな余計なことをしたのである。その
当時君は文学者をもつてみずから任じていないなどとは
夢にも知らなかつたので、同業者同社員たる余の言葉が、
少しは君に慰藉を与えはしまいかという己惚うぬぼれがあつたん
だが、文士たることを恥ずという君の立場を考えてみる
と、これは実際入らざる差し出た所為であつたかもしれ
ない。返事には端書はがきが一枚来た。その文句は、難有ありがとう、
いずれ拝顔のうえとかなんとかあるだけで、すこぶる簡
単かつあつさりしていた。ちつとも「其面影」流でない
のには驚いた。長谷川君の書に一種の風韻のあることも

その時はじめて知った。しかしその書体もけっして「其面影」流ではなかつた。

それから、ずっと打絶うちたえた。次に逢つたのは君がロシアへ行くことがほゞ内定した時のことである。大阪の鳥居君が出て来て、長谷川君と余を呼んで午餐ごさんをともした。所は神田川かんだがわである。旅館に落ち合つて、あすこにしよう、こゝにしようと言議ごんぎをしている時に、君はしきりに食い物の話を持ち出した。中華亭ちゅうかていとはどう書いたかねと余に聞いたことを覚えてゐる。神田川では、満洲へ旅行した話やら、ロシア人に捕つらまつて牢へ打ぶち込こまれた

話をしていた。それから、現今のロシア文壇の趨勢すうせいのた
えず変っている有様ありさまやら、知名の文学者の名やら（その
名はたくさんあったが、みんな余の知らないものばかり
であった）、日本の小説の売れないことやら、ロシアへ
行ったら、日本人の短篇を露語ろごに訳して見たいという希
望やら、いろく述べた。なにしろ三人寐ねそべって、二
三時間暮らしていたのだから、ずいぶんゆっくり話しも
できた。最後にダンチェンコのために宴会をやるつもり
だから出席してくれるということと、それから物集もずめのお
嬢さんを、自分がいなくなったら托したいという二件を

依頼した。それで分かれた。

最後に逢ったのは、出立しゅったつの数日前ぜんいとまごい暇乞まごいに来られた時である。長谷川君が余の家へ足を入れたのはこれが最初であつてまた最終である。座敷へ通つて、室内を見渡し、なんだか伽藍がらんのようだねと言つた。暇乞のためだからべつだんの話も出なかつたが、たゞ門弟としての物集のお嬢さんと今一人北国の人のことを繰くり返して頼んで行つた。

一日越えて、余が答礼に行つた時は、不在で逢えなかつた。見送りにはつい行かなかつた。長谷川君とは、そ

れきり逢えないことになってしまった。露都ろと在留中たゞ一枚の端書をくれたことがある。それには、弱い話だがこっちの寒さには敵かなわないとあった。余はその端書を見て気の毒のうちにも一種の可笑味おかしみを覚えた。まさか死ぬほど寒いとは思わなかったからである。しかし死ぬほど寒かったものとみえる。長谷川君はとうく死んでしまった。長谷川君は余を了解せず、余は長谷川君を了解しないで死んでしまった。生きていても、あれぎりの交際であったかもしれないが、あるいは、もつと親密になる機会が来たかも知らない。余は以上の長谷川君を、長谷

川君として記憶するよりほかに仕方のない遠い朋友ほうゆうである。君の托されて行った物集の御嬢さんは時々見える。北国の人に至っては音信たよりさえない。

(明治四二・八・一)

日本文学電子図書館

長谷川君と余

著 者 夏目漱石

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第 7 卷」角川書店
昭和42年 6月30日 6版発行



日本文学電子図書館